

本日の学び：「わたしを信じるか？」 テキスト：ヨハネ11章17-27節

【理解の手がかりとして】

イエス様は、このラザロの復活の出来事を通して、「死後の希望」について私たちに教えてくれている。ラザロという一人の人間の身におきた出来事、その死と生を憶えるということは、決して他人事ではなく、「わたしの死と生」の事柄。私たちはこの箇所(出来事)を通して、確かに死をくぐり、そして確かに復活させられたラザロという人の名を記憶する。そしてそれによって、私たちは「わたしの命の主」を知る。

そしてまた、私たち一人一人の死も生も、主がこの全世界を救おうとなされる計画から決して無関係ではない。私たちの人生における喜びも悲しみも、痛みも病も死も、決してそれから無関係ではない。私たち一人一人の人生が、主の壮大な救いのご計画の中で用いられる。そういう壮大なご計画の中に組み入れられ用いられるということの中に、私たち一人一人の人間の祝福も救いも喜びも希望もある。

イエス様はこう言われる。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」(11:25-26)と。この言葉は、今日の御言葉の要(かなめ)。いや、新約聖書全体の要と言って良い程の言葉。この御言葉を受け容れるか否か、それが大きな分かれ道である。

イエス様はここで「わたしは復活であり、命である」と言われる。この「わたしは・・・である」という表現は、ヨハネ福音書の特徴とするところで、イエス様は度々そのような仕方でご自身を啓示なさった。例えば、「わたしが命のパンである」(6:35)もそう、「わたしは世の光である」(8:12)もそう、「わたしは良い羊飼いである」(10:11)もそう。それらの言い方全部に共通するのは、

「終わりの日」に起こるべきことが、イエス様において「現在」となっている、ということ。

マルタはイエス様とのやり取りの中で「復活」についてこう述べている。「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」（11:24）と。この終わりの日の復活に関する認識は、当時のユダヤ教徒のほとんどが共有したものだ。彼女はイエス様の言葉を、遠い遠い未来において実現することだと考えていた。しかしイエス様の救いは、単にそのような未来のことではない。今、彼女の前に立っておられるイエス様ご自身が「よみがえり」そのものである。よみがえり、それは「永遠の命」そのものであるということ。

私は以前、この「永遠の命」という概念について、それは未来のこと、肉体の死後の世界のこと、と考えていた。しかしそうではなくて、それは「今（現在）」ここに実現することなのだとして理解した時に、この世における人生の希望とそして宣教の緊急性を強く感じた。ある人は言うかもしれない。「いつか信じよう」と。別の人はこう言うかもしれない。「この世の楽しみをし尽くしたうえで、肉体の死の間際になったら罪悔い改めて信じよう」と。しかしその時、つまり自らの死がいつ来るのか、私たちは知り得ない。突然の災害に見舞われて、不測の死を迎えるかもしれない。「あの時信じておけばよかった」という後悔は後の祭りである。

あらためて、イエス様の言葉を私たち一人一人への招きとして聞こう。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」——冒頭に、「イエス様は、このラザロの復活の出来事を通して、『死後の希望』について私たちに教えてくれる」と述べた。しかしこれは単なる「死後の希望」ではない。死後の希望は、同時に「今現在」の希望である。この世に生きながらにして手にする「永遠の命」である。そこには恐れはなく平安があるのみ。

私たちはそのような信仰者に出会う。死後の不安が解消されているがゆえに、この世のどんな困難の

中に身を置いても平静と感謝と祈りの生活を過ごしている人々がいる。そのような人の光に接する時、その人を中心として、光の円が広がって行きます。そのような良い影響をもたらすべく、私たちは世に遣わされる。私たちはそのような光の発信元になりたいものである。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」というイエス様の御言葉が、私たち自身の信仰の核心として揺らぎなき時、「これを信じるか」という宣教の言葉が力を発する。キリスト者一人一人は、あらためてこの御言葉への確信を強くしよう。

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」（口語訳:コヘレトの言葉12章1節）とあるが、言い換えて「あなたの若い日に、あなたの命の主を覚えよ」と言いたいと思う。これは決して青少年にだけ言われている言葉ではない。誰しも「今」が最も「若い日」。中年者も、老年者においてもそう。

「いつか」ではなく「今」が大切。今一度主の言葉を心に留めよう。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。今、このことを信じるか。」

『聖書教育』より

「信仰とは、今ここでイエスさまと向き合い、信頼して身を起こし、委ねることなのです」（聖書の学び～マルタの期待）——何にも根拠を置かない盲信ではなく、イエス様の御言葉に信を置く（お任せする）、それがキリスト者の信仰であろう。